

A Study of TENDER IS THE NIGHT

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Mikita, Tokumoto メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00005223

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



Tender is the Night 研究*

牧 田 徳 元

① 小説の誕生

著者 Fitzgerald は 1921 年、*This Side of Paradise* を世に問うた。これは著者自身の夢と経験を織り混ぜた書である。そして出版と同時に、著者に名声と金を齎らした。なお後年までこの種の青春の無軌道生活描写が著者の本領であるかの如き錯覚を読者一般に植えつけるという、著者にとって誠に不本意な結果を生んだ。当時 Fitzgerald はニューヨーク社交界の寵児として歓迎され、他面真面目な著述から遠く傾向にあった。次いで彼としての最大作 *The Great Gatsby* が 1924 年発刊になった。これは状況描写の抑制もよく利いており、各要素の配列の工夫もすぐれており、更に行文又簡潔にしてロマンチックな詩的效果に富み、彼としては才能の絶頂期を思わせる。然し著者はパリや Riviera の社交界で甘やかされ得意になった。一方妻の Zelda は 1930 年完全な精神分裂症状に陥るという家庭的危機に見舞れた。そして生来自己破滅型の彼はアルコール中毒症となった。こうした一家の病氣と落胆の生活という状況下で彼は *Tender is the Night* をかき上げ 1934 年出版にまでこぎつけた。そして死の直前には更に新たな小説 *The Last Tycoon* の断片を残した。

さてこの *Tender is the Night* はあり余る魅力と才能に恵まれ乍らもその期待を完うしなかった青年精神医学者の Dick Diver を主人公として、彼の退歩・墮落・崩壊の途を辿っている。それは金の魔力にとりつかれた真面目な医師が、困難で献身的な学究生活を放棄して、逸楽と無軌道の海外移住者の群に埋没し切るのである。このアメリカの一市民 Dick Diver

は、外面的にも心情的にも極めて作者の Fitzgerald と酷似している。それは兎も角これは Dick において象徴されるアメリカ的中産階級の美德が、ヨーロッパという土壌に移植された場合に不幸な枯死を遂げるという従来枚挙にいとまない命題の一事例である。そうした文化・文明の対比・衝突を底に蔵した作品としてこれを解釈し乍ら、一個人 Dick の墮落・崩壊の過程や、一特定時代のアメリカ風俗の図絵として受取りたい。

上にも触れたが、1919 年から 29 年に至る約 10 年間の作者個人の生活が陰に陽に素材としてこの小説に投入されたり、色濃くこれを染めていることは否みようのない事実である。その場合作家の精神状況は主人公 Dick Diver には勿論時として Rosemary Hoyt のそれにも反映している。そして金銭に対する態度や感情、妻の分裂症についての夫の悩みと病氣に対する知識、アルコール中毒症に対する恐怖感、とこれに対する戦い、さてはリビエラやパリにたむろする海外移住者の群—その中には小説家・音楽家など芸術家が多い—と彼等の生活態度などの諸点では、作者自身の見聞と経験が大いに影響をしている。そして我々には Dick の錯雑した感情の綾や襷に、又彼の過剰なまでの罪悪感の展開にアメリカ的教養と良心の悲劇の一典型を読みとるものである。

この小説の成立過程を克明に研究した Dan Piper によるとこの小説は単行本として、1934 年刊行されたが、早く 1929 年以來著者によって着実に同一主題の物語として書き変え続けられているという。そのいくつかの試作品に対して著者は次のように題名を与えている。即ち

* 昭和 45 年 9 月 16 日受理

“*Our Type*”, “*The World's Fair*”, “*The Boy Who Killed His Mother*”などである。そして時として彼は手紙の中で、これらの物語を “*The Melarky Case*” と呼んでいる。これらの中で Francis Melarky を主人公とするものでは、Melarky と彼の母 Charlotte が現れる。二人はローマのホテルに滞在する。Francis の生い立ちをみるに彼は Tennessee 生まれで West Point に学んだが何か不明の規律違反に問われ、放校処分になる。後 Hollywood の Film-cutter になるが、ここでも私行上の過失を犯し、投獄を避けるべく止むを得ずアメリカを去ってローマに居住する。現在彼は映画技術者と自称する。彼は次いで Riviera を訪れて Seth Pipers 夫妻に出会う。(これは Diver 夫妻そっくりである。) そして Piver 夫人と恋仲となり、夫妻のあとをつけて、パリーにおもむく。そして次に催されるパーティの乱痴気騒ぎの渦中に溺れ、自制力を失なって身を亡ぼす。従ってこの Francis Melarky には作者はもとより、Rosemary や Tommy Barbon の一部が早くも現れている。筋としては Melarky は最後に狂気の発作を起こし母親を殺害し、警察隊の追跡から逃れて自殺を遂げる。

次に1932年の初頭、Fitzgerald はこれよりも野心的な作品の梗概を作っている。そこには我々が *Tender is the Night* でみる Dick Diver のような生来の理想主義者が世俗的成功と逸楽の両者を得ようとして大敗する所謂 ‘spoilt priest’ の物語がある。主人公は理想家的気質も才能も共に失って、徐々に飲酒癖に犯され、放蕩に身を持ちくずすのである。即ち主人公が Francis から Dick に移行する時、人物としても行動としても遙かに深みを増し複雑性をもつに至るのである。

② 初版と改訂版

第一版(今日 Bantam 版と称する)は第1・2・3部に分かれ、第1部は Rosemary Hoyt の視点に立ち、第2部のはじめに第3者の視点

に基づいて Dick Diver 青年時代を振り返るフラッシュ・バックの手法の部分がある。そして第3部では、先づ Dick の精神的・道徳的頹廢の度合いを次いで彼が次第に罪悪感はいなまれゆく状況を示そうとした。そのために Dick の視点が用いられている。然しここでは作者が感情的主観的に余りにも Dick の立場に深入りすぎている。そのため兎角感情抑制に成功せず、客観的な冷静さを失った描写が多い。この点著者は素材の取り扱いに際して、芸術的審美的距離感覚に欠けている。その反面病的ねままでに弱々しい自己憐憫に浸っている。次に短所としては、(a)貧乏な牧師の家に育った中産階級出の一青年が華やて富裕な海外移住者の生活に毒される過程と、(b)分裂症に悩む妻を持つ夫の物語とが十分に調和していないことである。これは物語の後半で素材の重みが作者を圧倒し、作者の処理能力の限界を越えたためでもある。然し批評家の中には Piper のように、ロマンチックな Rosemary の恋の詩的甘美性を高く買う人もあり、Robert Skalar のように第一部は創作的想像力の生んだお伽の国であるが第二部こそ素晴らしいという学者もある。即ち、ここで作者の歴史感覚が芸術的完全に到達しているという。Skalar は Dick が自己の理性や意志の抵抗に会い乍ら Nicole との恋におち結婚するくだりは、詩的韻律とロマンチックな暗示性に富む素晴らしい出来映えの章であると推奨する。そして続けて言う。こうした詩的甘美に対比させるに克明な科学的記述の病状分析・診療の記録があり、極めて事務的で無情苛酷な、姉の Baby Warren 言動があることは一層作品の効果を高めるに役立つ。

以上の様に初版を好む批評家に対して Malcolm Cowley は改訂版の長所を次の様に主張する。

第一版はリビエラにおける Divers 一家が Rosemary Hoyt の純真・無邪気な眼に映ずる場面ではじまる。そして彼女の一途な恋愛のあり方に重点がおかれている。次いで Warren 家

が財力病で身の娘の配偶者として青年医師を買おうとする場面など過去の事実が伏せられている点は特に読者にサスペンスの効果を持つと指摘している。これに対して改訂版は1917年ウィーンやチューリヒにいた頃以来の医学徒 Dick Diver の歴史が年代的に叙述されている。従って全般に平板な読み物となりサスペンスの妙味はない。然し Cowley はその反面次の改良点がみられるという。初版は焦点のおき場所がボヤけていた。この一巻を読み終えた読者は、一体著者の意図がリビエラにいるアメリカ人の一群について書くためのものか、即ち集合的の主人公を中心とするこの一篇の小説は一個の社会研究であるのか、それとも成る個人 Dick Diver の栄光と衰亡に関する心理小説をかくことを目指しているやら判然としない。然し我々は改訂版を手にするとき、この疑問は氷解する。ここでは物語の順序が入れ変って若いアメリカ人医師が大戦中のチューリヒへやってくる所で小説を出発させてある。これだけの違いで作者は明らかに、この小説が心理的であり、且つ Dick Diver についての物語であり、然もその社会的意味は比喩的方法で暗示されている。又 Dick は全体を代表する部分である。彼はリビエラ居住のアメリカ人群の代表であり、社会学的には、ウォール街の恐慌をもって終る一時代の代表である。然し何よりも先ず Dick は彼自身を表現している。そして他の人物群をして、それぞれ自己に対して隷属的役割を演じさせている。同時に彼等もおのづから彼の周囲に集まってくる。例えば Rosemary は彼を衰頹させる力として活動を始めるし、Abe North の行状は、Dick の運命を予告する。そして Tommy Barban は Dick よりも才能は劣るが、彼よりも強力な後継者となることが次第に判明する。といった具合に発端から終末まで、Dick 中心の小説となることによって改訂版は全体的統一を得ている。以上の理由で Cowley は改訂版を推奨している。

⑨ 青年医師の結婚

主人公 Dick Diver は1891年生れである。彼は運動家タイプで美貌の聡明なアメリカ青年医師である。青年の魅力はすべて兼ね備えている。この Dick がやがて結婚の相手としてシカゴの Warren 家の娘 Nicole を選ぶのであるが、彼は Nicole の姉 Baby に対して初対面の挨拶をして次の様に自己紹介をししている。時は1919年9月である。「僕は医師で父は今引退しているが牧師です。僕の一家はバッファローに住んでいました。僕の過去の履歴はどこから調査して頂いても結構です。僕はイェールに進み、更にオックスフォード特別奨学生になりました。曾祖父にはノース・カロライナの知事があります。」事実 Dick はオックスフォードを終えてホプキンズで学位をとり、更に1916年、戦争中にも拘らず無理してウィーンへやってきた。彼の気持としては、かの偉大なるフロイト先生の教えを一刻も早くうけておかないと、先生は空襲の犠牲になるかも知れないと案じたから。戦時下のウィーンの生活は燃料にも事欠く状態であった。然し彼は Damenstiftgasse に引きこもって著述に専念した。その研究の成果は1920年チューリヒから発行された著書の根幹になったのである。それに先だって1917年の春 Diver 医師はチューリヒを訪問している。年令は26才であった。当時の彼は全身魅力と愛情に溢れ、本人こそそれと気づいていなかったが、誰の眼にも無限の将来を約束された幸運の人であった。又精気と意志力は横溢し人生の絶頂期を目前にしている感があった。更に精神科の医師学者として豊かな資質に恵まれ、将来の大成については同僚は誰も保証しない者はなかった。文字通り、'lucky' Dick の名にふさわしかった。他方彼自身も内に湧き起る精力と学問に対する自信を持っていたことは次のエピソードにも窺える。——即ち彼は1917年のはじめ、所蔵していたテキスト100冊を石炭代りに燃して暖をとった。その時彼は次のように確信を持っていた。自分はこれらの本の内容のダイ

ジェストである。従って若し必要とあれば5年後に、この100冊の内容を余さず再現してみせる自信がある。更に軍の命令でフランスの療養所勤務を命ぜられたとき、職務内容が治療よりは管理事務であることに不満を感じて、気持の埋合せに教科書をかいたり、将来の野心的研究に備えて資料集めをしたりした。

1919年漸く現地除隊になった彼はチューリヒの或る精神療養所に Franz Gregorovius を訪問した。用件は Dick が文通を続けている患者 Nicole Warren について意見を聞くためである。Nicole はシカゴの富豪 Warren 家の17の妹で、その前年即ち1918年以来ここで治療を受けている。実は早く妻に先立たれた Warren 家の当主 Devereau が娘に対する愛情が強すぎる余り、親子の情愛を枠をこえて、愛人同志の愛におちた事件の悲しい結果だったのである。そこで Devereau Warren から相談を受けたこの養療所の当主 Dr. Dohmler は非遺伝性男性恐怖症と命名し、Warren 氏に対しては自分が引きとって治療するが次の条件を守るよう指示した。即ち5ヶ年絶対に娘と面会をしないと約束することであった。

さて患者 Nicole の Dick に当てた手紙にも彼女のあきらかな恋愛感情の告白があった。Franz はこれを偶然性感情転移と呼んで、Dick に対してこんな患者から遠ざかるのが賢明な策であると忠告する。さて更に4週間の後、Dick Diver 医師は再びこの療養所を訪れて先の Franz 夫妻に昼食に招かれ、その後で Dr. Dohmler に会う。Dick は先ず Franz の妻——田舎出の Keathe のつましい生活態度に一驚する。然も不思議なことにこの夫婦はそんな将来の希望の全くない生活に妥協し切っている。これは Dick にはとても我慢がならない。Dick はもっと優雅と冒険を必要とした。そして自らの将来計画について、自分は遠大な希望を懐いている。一流の医師、いや世界一の精神医学者になるのだ、と胸を張っている。その反面彼は心の片隅で、戦後のフランスでアメリカ

人一般が享受してきた物質的贅沢、生活上の華麗さは何か自分が子供時代からうけてきた訓練とそぐわないものがあると気づいていた。現在の自分は真面目な学者の道をめざしているのだ。自分の生活は自分の前途に好ましくない影響を与えるかも知れない。本来自分は儉約・質実・克己心を旨として育てられた。然し現在は贅沢・逸楽の誘惑に手もなく負けていると自覚するのであった。一層悪いことは周囲の誰彼となく彼のあり余る才能を賞讃して、前途有為の青年医師とちやほやしすぎることであった。

さてこの日の会見で Dohmer も Franz も Nicole はあきらかに或る意味で担当の医師に恋愛している「感情転移患者」である。こうした恋愛は、通常世間の出来事と違って捨てておけない特殊ケースである。この恋愛は直ちに停止の必要がある。Nicole 嬢は現在は快方に向っているが全快の目処は全く立っていない、と結論を下した。

一方その頃の Dick の眼にうつった Nicole は、頬骨の高い、かすかに顔一面に哀愁をたたえているが、以前に逢ったことのない程の美人である。彼女は中年になってもその容色の美を失わない型の美人と思われた。そして Nicole のあからさまな愛の訴えを聞き、自らも何時からとなく彼女に対して心の傾くのを抑え得ないのであった。そんな時 Dick は医師としての立場で相手の感情を確かめる方法として次のような忠告を試みた。「もうすっかりよくなったね。過去を忘れなさい。心の負担をとり除いて生活しなさい。アメリカに帰ったら社交界へ連れ出して貰って幸福な結婚をすることです。」然し彼女は悲しげに謙虚に自分は結婚を永久に断念している、と答えた。そして Dick が立ち去ったあと何時までもその眼で彼の姿を追いかけている。

一方姉の Baby は妹が一時快方に向っているので実験的に通常の生活環境に彼女を引き戻してみる。そして Diver 医師に向って妹の将来について相談をもちかける。即ち Nicole は

Diver 医師の献身的な治療のお蔭で相当によく
なった、誠に感謝に耐えない。ついては、サナ
トリウム他の先生方は唯、患者は自然で楽し
く生活せよというだけで何等明確な方針も計画
も示してくれない。自分としては、妹に何をし
てやったらよいか一向に分らず、極めて不安で
あるという。更に最近でも時には発作を起して
髪を切るという事件のあったことを心配顔で言
及する。

これに対して Dick は、「そうした症状は一
向大したことでありません。いわば恒久的気紛
れ位のもので。性格的なもので、強いて変え
ようとするにも当りません。」と軽く答えて、
さも軽症患者であるから気にもとめていないと
いう風をする。この時以来 Baby は妹と Dick
の仲をさぐり、且つ Dick の心を妹に向わせ
て、出来得べくんば、妹の婿にしたいと考えは
じめる。彼女はまた妹の病気の直接原因が父親
にあらうとは疑ったことすらないのである。そ
して Nicole は少なくとも未だ数年面倒を見て
くれる医師を必要とする。あり余る Warren
家の富を投じて若い精神科医を一人雇い、シカ
ゴ大学へ来て貰い、妹の婿となり、同時に主治
医兼専属看護人になって欲しいという、即ち、
姉は、Warren 家の金で Nicole のために医師
を購なおうとしているのであり、一般的な相談
のもちかけという偽装の下に、Dick を Nicole
の将来の夫の候補にしていることを明らかに
言外にほめかすのであった。

そして Dick の方でも Nicole に対しても
と冷静に分別を働かせて、現在の恋愛感情を分
析、整理するよう求める。即ち貴女は、看護婦
に対する患者の恋にも似た状態で自らを苦しめ
ています。すると Nicole は答えて、昔はとも
かく今の自分はすっかり分別も常識も備えてい
ます。貴方が私がこれまでに会った最も魅力あ
る男性であると自覚していなければ私は依然狂
気です。これは全く私にとって苦しい幸運でし
た。それで私は貴方と自分についての全てをよ
く弁えています、と答える。

こうした次第で、Diver 医師は次第に Nicole

との結婚に気が進む。そして彼が最終的に結婚
の決心をつけたのは1919年の9月、彼が28才、
Nicole は19才であった。その頃 Dick は Baby
に向って、自分は決して貴女の家の巨万の富を
あて込んで結婚するようは冒険家ではありません。
若しそうとられたら甚だ心外です、と申し
入れている。

Diver 夫妻にはやがて長男の Lanier が生
れ、次いで次女 Topsy に恵まれた。然しこの
長女の誕生の直後、妻の病気の再発があった。
それを境として妻はしきりに夫に向って生活態
度を変えるよう誘惑をはじめた。それは精神医
学者としてのきびしくつらい生活や修業から逃
避して、あり余る金を消費し乍ら、転々と避暑
地をめぐって上流社会の優雅で逸楽の生活に入
れとすすめるものであった。Dick は妻の誘惑
の声をきく度に我が理性と意志が萎縮して行く
のを自覚せざるを得なかった。

“When I get well I want to be a fine
person like you, Dick…… I would study
medicine except it's too late. We must
spend my money and have a house……
I'm tired of apartments and waiting for
you. You're bored with Zurich and you
can't find time for writing here and you
say that it's a confession of weakness
for a scientist not to write. And I'll
look over the whole field of knowledge
and pick out something and really know
about it, I'll have it to hang on to if I
go to pieces again. You'll help me, Dick,
so I won't feel so guilty. We'll live near
a warm beach where we can be brown
and young together……” p. 67

妻は一方では夫を科学者としての使命を果さ
せ大成させるためにアパートを引き払って我が
家を持とう、と提案する。そうすれば著述に専
念出来るという。然し他方ではその家は暖かな
海水浴場近くであり、そこへ移ったら肌を焼い
て若やいだ生活がしたいという。又自分も夫に
負けずに精神分析学の研究をしたいと異常な競
争心を燃やし、それが昂じて嫉妬になっている。
夫の Dick は元来貧乏な牧師の伴である。

現在の贅沢に対して常に罪の意識を伴わずにはおられない。この罪悪感の自覚は自己嫌悪につながり、これが昂ずると自暴自棄となり、更により深い罪の道を選ぶのである。そして従来自らの精神の独立性維持のため、妻の金と自ら儲けた金との用途を峻別していた Dick も、贅沢に身を任せるに従って次第にそうした潔癖を失った。

こうしてリビエラに居を構えるに至ったが、その頃 Dick は或るホテルで宿帳に署名する時ふと、Diver 氏と妻とかき、Diver 博士と妻とかくのを忘れたことがあった。これに対して妻の Nicole は厳しく責めた。即ち、医学者としての自覚を失っている、自分の職務や使命を忘れた情けない夫だというのである。現在の Dick は研究心を失った一介の観光客でしかないのだ。それが署名に直接反映したまでであるという。これを聞いて Dick は深刻な自責の念にかられる。

このように妻は名誉欲から夫に向って著述に専念せよ、新説を発表しなければ、学者としての自殺行為だ。従って診療を廃業せよ、と勧める。これはどれも皆尤も至極な主張である。然し矛盾し相反することが多い。それは厳しい学者の生活環境から離れて、非生産的な金と暇を持って余している社交界の遊墮な世界に入れというのである。

④ Rosemary Hoyt の出現

1925年夏のこと Diver 一家4人が多数のアメリカ人と一緒にリビエラの Cap d'antibes の浜で遊んでいる。その時 Diver 夫妻の前に現われたのが若さと健康にあふれ、美貌で魅惑的なアメリカの映界スター Rosemary Hoyt である。彼女は、'Daddy's Girl' という題名の映画で一躍有名スターになった。その後、真冬のベニスで、水泳中のシーンを撮影中肺炎にかかり、唯今は母の Mrs. Speers と共に南仏で病後の保養につとめている。母は娘 Rosemary の仕事向きのマネージャーでもある。彼女はこれまでに二度幸福な結婚をし二回共、夫に先立

たれている。Rosemary の父であった最初の夫は陸軍軍医であり、2度目の夫は騎兵隊の士官だった。そして二人の夫に残された遺産を母はそっくり娘に提供する予定でいる。

さて Rosemary は、Diver 一家とそれを取り巻く友人達に魅せられる。特に Dick に対しては一眼みた瞬間から、自らの理性や意志で如何ともし難い程、心を奪われる。更に彼女はやがて妻の Nicole に何か奇妙な秘密を嗅ぎつける。

6月の朝 Grousse ホテルにいる18才の彼女の瑞々しい完全な美は、まさに完璧であり、いま子供時代を終ろうとする間際で、未だ全身に露を堪えている風情があった。彼女はいち早く此の地のフランス生活に不健康な要素を見出している。それは空虚でかび臭いものである。例えば、

Presently her ear distinguished individual voices and she became aware that someone referred to scornfully as 'that North Guy' had kidnapped a waiter from a cafe in Cannes last night in order to saw him in two. The sponsor of the story was a whitehaired woman in full evening dress, obviously a relic of the previous evening, for tiara clung to her head and a discouraged orchid expired from her shoulder. Rosemary, forming a vague antipathy to her and her companion, turned away. p. 72

ここには二組のアメリカ人がいる。禿頭の Louis Campion、高慢な Mrs. Abrams、小説家の Albert Mckisco と妻の Violet、それに頓智にたけた青年 Royal Dumphy の集団がその一つである。Rosemary はこれらの連中に反感と嫌悪を持った。特に Violet は彼女に向って自慢・吹聴を続けている。例えば Antheil と Joyce が自分の好みである。ハリウッドではこんな智的な話は聞かせて貰えませんが、実は私の夫は 'Ulysses' の批評をアメリカで初めて公けにした人物ですよ、とか、夫は今処女作を書き終えた所だ。これは 'Ulysses' の考えと一致するものです。ただ24時間で事件を完結

しないで、夫は100年を予定している。夫は主人公に衰亡したフランスの貴族を当て、彼を機械万能の時代と対照しています。といった具合に自慢し、自信のない夫をひやひやさせている。上の一群と別個にしているのが Dick Diver と妻の Nicole を中心にして下手糞な音楽家と軽蔑されている Abe North と妻の Mary,他に若いフランス人で Tommy Barban というのがいる。Abe は話声もゆっくりして内気そのものであり、これまで Rosemary の出合ったこともない位悲しげな風貌をしている。一方 Tom は大層魅力ある青年だが、それは洗練され、世間づれしているが、何処か野蛮な魅力を秘めていた。

Rosemary はこの第2群の男女と気心が合って交際を続ける中に、Dick Diver, Abe North, Tommy Barban という三人の男性には従来且って経験しなかった好ましさ、監督や俳優にみられない思いややさしさを発見した。Barban は野蛮で懐疑的、態度は形式張って完全好みでさえある。Abe ははにかみの底に何か絶望的なユーモアを持っている。それは楽しませてくれるが、同時に途惑いを与える。この二人に比べると Dick は彼等と根本的に異質な印象を与える。Dive 夫妻が特に料理と酒を吟味して彼女をもてなしてくれた晩、彼女はそれまでに逢ったどの男性よりも頼もしく、好ましい人物をそこに見出した。そして彼女は、どうにも抑制出来なくなった我が胸の中をすっかり母に打ちあける。

He seemed kind and charming - his voice promised that he would take care of her, and that a little later he would open up whole new world for her, unroll an endless possession of magnificent possibilities. p, 83

このように容貌・肉体といった外面上の美が完全であるだけでなく、Dick は、彼女の無限の可能性を引き出し得る人物である。彼女を素材として、如何なる他の男性以上に、素晴らしい芸術品を創り得る男にみえた。更に彼女を讚美

するかの如き彼の眠つき、さてはかすかにアイルランド系の韻律のこもった彼の声は聞くもの誰しもうっとりさせる。然し彼女は、どことなく彼に備わっている頑なさの性質の層に自分と同質の美德を見出した。それは、自己鍛錬、自己抑制の美德であった。即ち Dick のどこかに現在の生活環境や境遇に抵抗して学者の操を守り抜きたい、という意気込みが窺える。これが Rosemary には大きな魅力であった。彼は周囲の浪費と乱痴気騒ぎには心から打ちとけない様子だった。こうして Rosemary の心に遂に理想の男性にめぐり逢った。遂に決定的に彼を選んだ。という確信が湧くと共に、妻の Nicole は、Rosemary が我が夫を捕えたことを知る。又、その事実を告げる Rosemary のもらすかすかな溜息を聞きとったのである。Rosemary は、Diver 夫妻の傍にいつまでも滞在したいと願う。一方 Tommy Barban は Diver 家の内でも Nicole 夫人に惑きつけられている。Rosemary は Tom と Nicole の間にほのかな愛の芽生えを察知する。然し Barban は自分は18才の時以来8ヶ国の軍服を着てきた。世界中どこでも戦争のある所なら飛んで行きたいと自暴自棄になっている。然も Diver 夫妻が戦場へ追い立てるといって嘆く。

元来 Rosemary はロマンチックな性格であったが、これまでの境遇には、その欲望を充分に満たしてくれる機会に恵まれなかった。そして Dick に対して日増しに強く感ずる恋慕の情を母に打ち明けると、母の Mrs. Speers はそれを阻止する所か、却って激励するのであった。

'You were brought up to work - not especially to marry. Now you've found your first nut to crash and it's a good nut-go ahead and put whatever happens down to experience. Would yourself or him - whatever happens it can't spoil you, because economically you're a boy, not a girl.' p. 115

この様に母親は娘が見出した恋人が、'the real thrng' である以上、感情の赴くままに相手に向って体当たりせよと許可を与え、且つ

激励する。

一方娘は Dick との恋を成就させようと決心する余り妻 Nicole の存在は眼中にない。二人の子供を含めた一家に対する好意の感情に満ちているが、冷静な思慮にも判断力にも欠けている。そして Dick は心の中で、妻よりも Rosemary に気持の傾斜を覚え乍ら、彼女を失いたくない気持ちを持ち乍ら我が家に入りしないことを口先で要求するのであった。

後にパリのカフェで Dick に逢った Mrs. Speers は娘の恋愛について次のように語る。

‘We are glad we came here. We’ve had a good time, thanks to you. You’re the first man Rosemary cared for.’

又続けて

‘Rosemary’s had crushes, but sooner or later she always turned to me’ - Mrs. Speers laughed - ‘for dissection.’

‘So I was spared.’

‘These was nothing I could have done. She was in love with you before I ever saw you. I told her to go ahead.’ p. 182

こうした母の態度が冒険好きで多情な

Rosemary を創ったのである。

Rosemary は Mary North や Nicole とパリーで暮らして行くうちに、彼等 3 人が典型的なアメリカ人社会の代表である、現在の身分、職業にこそ違いはあれど、ヨーロッパ婦人と彼等とを識別する歴然たる要素の存在することを強く——意識した。即ち、彼等は生れた身分や地位という外在的偶然的要因によって今日あるのではない。自分達はそれ以上に恋愛や結婚によって特定の男性を選ぶか選ばないというより大きな偶発的事件によって今日の生活を得ている。然も自分達は男性の世界に満足して住んでやり、男性に対立してでなく男性によって個性を保持し得ている。勿論人によって立派な妻となるものもあれば高級売春婦となる者もいるが。又彼女の眼からみると Nicole は、不思議な魅力を湛えている。特に母から受けた中産階級のケチの教育の基準から判断すると、その気

前のよい買物振りは、捕え所のない不思議という他はなかった。時として Nicole は二頁に互るリストで買物をする。それで足らずにおまけにウィンドウの品まで買うのである。とても自分で使い切れない品を、友人に只で贈物するために買込むのであった。

⑤ 誘惑と墮落

(イ) 父の死

Diver 夫妻の結婚生活はリビエラのダイヤナ荘を本拠としてパリー、スイスの保養地のホテルを転々と巡って暮す形態のものであった。その間にも科学者として本分を忘れまいと Dick は、「精神分析医のための心理学」第 1, 2 巻を公にした。然し Dick が反省してみると、その第 2 巻は第 1 巻を敷衍して分量を水増ししたにすぎないものであることがわかった。更に彼の当初の意気込みにも拘らず、その新著に含まれている新説は僅か一二に止まるのであった。他方、Dick は我が行く末を思うとき漠然たる不安におそれのであった。

But he was currently uneasy about the whole thing. He resented the wasted years at New Haven, but mostly he felt a discrepancy between the growing luxury in which the Divers lived and the need for display that apparently went along with it. p, 184

即ち、彼一家の生活振りが豪奢華美になればなる程、一層虚飾みせかけの必要が起るといふ事実である。

そして Paris ではよく Diver 夫妻と Rosemary が同じホテルに泊り合せて夫の Dick は Rosemary とは友人ともつかぬ、恋人ともつかぬ関係を保ち乍ら妻に対しては又、医師特に看護人の立場を守ることを強いられた。

He saw Nicole in the garden. Presently he must encounter her and the prospect gave him a leaden feeling. Before her he must keep up a perfect front, now and tomorrow, next week and next year. All night in Paris he had held her in his arms while she slept light under the

luminol; in the early mornig he broke in upon her confusion before it could form, with words of tenderness and protectectoin, and she slept again with his face againat the warm scent of her hair, p. 186

特に Topsy の誕生以後、狂気の発作が頻繁に起るので Dick 妻への態度には夫として暖かくやさしく病妻に接するというよりは、感情や愛情を殺して無関心に冷静に医師对患者の事務的処理への移行があった。そして夫婦の間柄は全く形ばかり、名ばかりの索漠たる状況が続くのであった。

Having gone through unprofessional agonies during her long relapse following the birth of Topsy, their second child, he had hardened himself about her, making a cleavage between Nicole sick and Nicole well. This made it difficult now to distinguish between his self-protective professional detachment and some new coldness in his heart. As an indifference cherished, or left to atrophy, becomes an empty of Nicole, serving her against his will with negative and emotional neglect. p. 187

何の説得も説明も効果のない病妻に対して、現実の自己に対決克服する道だけを残して、退路を絶つより他に手がなかった。こうした状況が1924年まで続いた。

そして一家が、インズブラックで暮している頃、Dick は老父の死の報を受ける。そして父の葬儀に参列のため独りで一時アメリカに向った。ニューヨークに上陸し、バッファローに行き、父の遺体と共に父の出生地の南部に向う間中、Dick は父の死に際して感ずる悲しみ以上の悲運が自分の一生にまつわりついていることを痛感する。

For an hour, tied up with his profound reaction to his father's death, the magnificent facade of the homeland, the harbour of New York, seemed all sad and glorious to Dick, but once ashore the feeling vanished, nor did he find it

again in the streets or hotels or the trains that bore him first to Buffalo, and then south to Verginia with his father's body. p. 224

工業化の進む母国の活力、壮大、華麗な建築物の美も Dick には深い感慨を与えない。今では希望に燃える青春の若々しさを欠き、人生の岐路に立って、重大な選択を誤ったかも知れないという迷いを持っている。

Next day at the churchyard his father was laid among a hundred Divers, Dorseys, and Hunters. It was very friendly leaving them with all his relations around him. Flowers were scattered on the brown unsettled earth. Dick had no more ties here now and did not believe he could come back. pp. 224-5

父の埋葬を最後として永久に、父の祖国から絶縁されるのである。帰るべき故郷を失いつつあるという悲哀感、やるせない孤独感にひたっている。それも20才代のときならまたしも、最近急激に自分の将来の発展に限界をよみとりはじめた際だけに、ひしひしと厳しい現実感となって彼を圧迫する。然も彼は、これを機として幼少の時代から父にうけた厳格な処生の心得、アメリカ中産階級の道徳規範と永遠の訣別を迫られているのだと感ぜざるを得なかったのである。

そしてアメリカからの帰途、Dick は全く偶然にナポリで Rosemary 出くわす。彼女は初めてリビエラで Diver 夫妻に逢った頃全くの小娘だったことを思えば、今はすっかり成長して22才の大人になっている。彼女にはフローレンスで建築の研究をしていると自称する Collis clay がお供としてつき従っている。Dick は Rosemary が過去4年間にも何人かの愛人を持ってきたことと推測する。然しためしに「貴女は処女ですか?」と聞くと、「私はこれまでに数え切れぬ程の男を恋人にして来ましたわ。」と答える。これは全く予期しない信ぜられぬ返事だった。Dick は、彼女がこんな返事をするのは、故意に彼との間に障壁を設けるためのものか、それとも結局は彼に身を捧げ

る積りでおり乍ら一層意味深長な降伏をする用意か、いずれとも定めかねたのである。何れにしても、このもやもやした状況で彼の Rosemary に対する愛情はつものるのであった。そして障害の故にこそ彼女との接触を保持したいと願うのであった。そして反省してみると4年前彼女と初めて会って以来ずっと彼女の愛情を繋ぎとめたいと願ってきたのである。然も彼女の側から身を投げかけてくるのであった。然も今の彼女は明確な分別と見透しの能力を備えた成人である。

The past drifted back and he wanted to hold her eloquent giving -of-herself in its precious shell, till he enclosed it, till it no longer existed outside of him. He tried to collect all that might attract her- it was less than it had been four years ago. Eighteen might look at thirty-four through a rising mist of adolescence, but twenty-two would see thirty-eight with discerning clarity. P. 228

こうして永年に互る Rosemary と Dick 愛の完成があった。Dick の方では、丁度 Rosemary からの働きかけを待っているかの如く、手もなく彼女の誘惑に落ちた。然しこれは全く愛なき情欲の交渉でしかなかった。そして愛情に基づかない肉体交渉が、Dick の激情を減退させるという予期に反して、これを増加させるのであった。然も多情な Rosemary は所詮、Dick にとって手の届かぬ所へ行ってしまう赤の他人に他ならない。これに対して妻の Nicole は精神病患者であっても、彼の唯一人の女性である。ずっと妻に対して嫌気を感じつづけてきた。然し Rosemary と過ごした時間は逸楽の不倫行為でしかない、と Dick は反省するのであった。

次にまた偶然 Baby Warren 逢った。彼女は Dick が妻を伴っていないので不審に思う。そして妹の病気の再発について報告を求める。彼女は当初から治療に当たってくれた Dohmler 医師に誤りがあったのではないかと不信の念を持っている。それによると現在チューリヒでの

療養所で加療中の彼女のために思い切って新しい療養所をあてがってやりたいというのである。即ち、彼女が出資者になって Dick と Franz Gregorovius に新療養所を経営させ、そこに Nicole をおくのである。妹の病気治療に役立つならば如何なる多額の費用も惜しまぬという意見であり、且つ彼女が全治の見込の少ない患者ならば、いっそ生涯病院住いをさせた方が自分も安心出来るというのである。かと思うとその直後 Baby は診療所やりビーエラのダイヤモンドのように高い断崖に臨んで孤独な家で世捨人の生活を送るのでなくて、ロンドンで生活させた方が妹のためによからうと提案する。その理由としては、

‘The English are the best-balanced race in the world.’ であり、

‘I meant it might be nice for you to take a house in London for the spring season - I know a dove of a house in Talbot Square you could get, furnished. I mean, living with sane, well-balanced English people.’ P. 234

こうして彼の意志と無関係に Warren 家の富の力で生涯買い続けられる運命にある自分を見て、耐え切れぬ程暗澹たる気持におそわれるのであった。Baby はこうした問題はあくまで Dick が最終的に決定すべき性質のものである、自分にとかくいう資格は全くない、といい乍らも、彼女は続けて、Warren 一家の資産が最近余りに急激に増加するので何等か使途を見出さねばならぬ。ついては Nicole の病気治療に役立つものなら如何程の経済負担にも応じたい、というのである。つい義姉 Baby の高圧的態度に立腹した Dick は、つい彼女と口論して、「やはり僕は Nicole には不向きな男です。

Nicole は僕以外の医者と結婚すべきだったのです。無限に信頼して任せられる男を見つけられよかったです。」と言う。そして妻が死ぬか、治療不可能状態にまで病勢が悪化するか、さては自分に別の愛人が出来るかなど思うと、彼は精神的にも肉体的にも異常を意識しはじめるのであった。現在の彼は結婚状態を維持して

いる。又二人の女性に対して共に苦渋と嫌悪感を持っている。然もそのいずれにも幸福を与え得ないのである。その揚句 Rosemary に対していう。

“I guess I’m the Black Death,’ he said slowly. ‘I don’t seem to bring people happiness any more.’ P. 240

次にローマへやってきた Dick は酒場からホテルへ帰ろうとして数名のタクシー運転手と料金がもとで口論し、その揚句仲裁役を買って出た私服警察官を殴りつけた。このため彼は手ひどくやっつけられる。彼が痛みを感じてよろめいたかと思うと、鼻も欠け、眼も飛び出すかと思う程、所きらわず打たれ、蹴られ、肋骨も折れただけのような暴行をうけた。そして、半死半生の状態で留置場に投げ込まれた。これも、今の彼は僅かの問題で怒りの感情が制止出来なくなっているためである。その後も彼は2人の百姓上りの警官に手錠をかけられた上殴打された。遂に Dick 使いが Baby Warren の許に到り、彼女が四方奔走して救出に当たった。Baby は、Warren 家の財力に物言わせてアメリカ大使館の副領事 Swanson を動かし、Dick は漸くのことで無罪放免となる。

この事件は以前の Dick には想像も出来ない不祥事であった。無智無学の無頼漢と喧嘩し、その結果、肉体的には全身に負傷した。又刑事事件の被告となってイタリーの法廷に引き出されたことも不名誉この上ない。Dick は精神的にひどく荒廃している証拠である。彼はこの事件を契機として我が人格が一変したことを自覚する。自分はもう立派な紳士の待遇に値しないとやや自嘲気味の反省をする。今生れ変わった自分は果して如何になるか。それは不吉な予感を孕んだ未定の状況である。ただ外的事情によって一層悪化することだけは確実だ。

やがて Dick はホテル・キリナリーで傷の手当を済ませ、モルヒネを貰って、眠りにおちる。Baby はその間医師、看護婦その他十二分の手を尽くしている。

(㊦) 岳父の病氣

父の葬儀でアメリカに帰っていた Dick は今 Franz と共に共同でチューリヒに療養所を経営している。勿論出資者は妻の Nicole である。或る日チリーの大富豪の息子でアルコール中毒、同性愛患者の診察を依頼されて、Franz と打合せてローザンヌに赴く。此の青年は現在ローザンヌのホテルに父親につき添われて滞在しているが、Dick が診察した上、治癒可能と判断した場合はチューリヒまで連れてきて欲しいというのが Franz の考えである。勿論充分すぎる程の報酬が約束されている。然もゆっくり時間をかけて、休暇を兼ねて出張して貰いたい、という趣旨のものである。然しその言葉の裏には、この頃妻の Kaethe から Diver 家に対する不満を重ねて持ち出されていることに対する一策でもあった。その中には Dick の顔一面の傷についての不審もある。Franz はその傷は大西洋航路の汽船で拳闘練習をして受けたものだと一応妻にいいくるめた。然し Dick の眼のふち全体の隈や、毎夜のように強度の酒を嗜む習慣は、誰の眼にも、弁護の余地がない。アルコール中毒患者を収容している病院の医師としては、論外である。それでも Franz は、病院の経営資金が Nicole から出ており、Dick は稀にみる有能な医師であるなどの理由を挙げて妻の説得に当たった。然し彼として内心では次第に Dick に対する疑惑は深まる一方であった。一方ローザンヌへやってきた Dick は、放蕩と飲酒癖から精神錯乱症におちいる患者の Francisco に逢う。彼は Harrow から Cambridge の King’s College で墮落し、ついで専属お供の医師を連れてスペイン旅行をする間に一層病状を悪化させたという。Francisco 自身 Dick に告白する。

‘It’s helpless. At King’s I was known as the Queen of Chile. That trip to Spain — all it did was to make me nauseated by the sight of a woman.’

p. 263

Dick はこの患者に対して、「お前は勇気をもって情欲を制しなさい。そして自らの行為に責任のもてる人格にならねばいけません。それに

は先づ情欲を刺激する飲酒を慎しむことです。」と説く。然し Dick, 自ら省みて、自分が飲酒から逃れ得ないのである。それでいてこうした訓話を患者に与えねばならぬとは悲しい、皮肉な役割だと思ふ。

此の地のホテルで Dick はたまたま会った旧友の Royal Dumphrey から妻の父 Devereau Warren が、家族にも内緒で病氣療養のために来ていると聞かされる。これに驚いた Dick が早速調査した所では、岳父の Warren 氏は、表面上の症状は肝臓の機能停止である。然しその原因はアルコール中毒と判った。然も彼は精神病の Nicole は言うに及ばず、姉娘の Baby にも隠れて独り ローザンヌの病院住いをしていゝ。そして深く前非を悔いて、死ぬ前にせめて一度び Nicole に逢うことを望んでいる。Dick は早速この間の事情を間接的に伝える方法を検討した。然し電話の手違いと Kaethe Gregorovius の軽率な処置から、Nicole は父が瀕死の状況に在るという事の真相を知った。当然彼女は強度の打撃をうけて、病状は一挙に悪化した。

この事件が終つて一週間後、更に医師として致命的な打撃を Dick に負わせる事件が持ち上つた。それは、同僚の Franz の留守中、オーストリア人の患者 Von Cohn Morris の両親が勝手に荷物をまとめて、一方的に退院を宣言するのである。その父親の言い分はこうだ。「わしの息子が此処に在るのはアルコール中毒のためだ。それなのに息子の話だと医師の貴方がウィスキーの匂いをさせて患者に接してゐる。大体わしも妻も生れてこの方ウィスキーなぞ一滴も触れたことがない。然るに息子は残念なことに中毒だ。その息子を貴方に托したのは治療のためである。それなのに、貴方がウィスキーを飲んでみせるとは、こんな立派な治療法がまたと他にあるだろうか。」と叫ぶのである。そしてさっさと病院を出て行く。Dick は内心で、この事件の責任をとろうと覚悟する。彼は夕食後に寝酒として一杯づつラムをきちんと量って飲んでいるだけだ。そして時たま午後にはジンも僅かたしなむ。平均して一日半ポイントのアルコー

ル分にすぎない。こうして用心に用心を重ねたにも拘らず、患者にアルコールを嗅付けられたのは誠に残念だ、と思ふ。自分としては言い訳はある。然し他方飲酒の事実は動かし得ない既成の過失である。これは結果からみて、明らかに医師の倫理に反する行為であり、弁解の余地はない。こう推論するとき彼は医師としての自信と資格喪失感におそわれるのであつた。次いで彼はチューリッヒでの診療生活にも興味を失い、遂には精神分析学者としての誇りも意気込みも感じなくなるのであつた。その揚句現在 Franz と共同でやっているサナトリウムから身を引く方法を真剣に考慮する。そして Franz と相談の上、病院に対する Nicole の出資金を引き出す策を講じたのである。

He was seized by an overwhelming disgust for the situation. To explain, to patch — these were not natural function at their age — better to continue with the cracked echo of an old truth in the ears.
p. 274

こうして家庭では妻との仲もうまく行かず、仕事にも行詰つた Dick は、2人の子供に接する時だけ別人のように楽しそうであつた。長男 Lanier は9才、娘の Topsy は7才になつてゐた。母親似の娘は奇麗で、身のこなし具合も立派であつた。

1929年、チューリッヒのサナトリウムをやめた Dick は再びピュラのダイアナ荘に居住することになる。そこで今度は、酒好きのフランス人女中 Augustine と口論する。Dick はこの女中が無断で高価な主人の酒を飲むと責めた。すると相手は居直つて喰つてかかつた。「何、警察を呼べるものなら呼んだがよかろう。私の兄も警官の一人だ。貴方達こそ、私共の国へ勝手にきて、上等の酒を勝手気ままに飲んでいる醜いアメリカ人の野郎だ。」とののしるのである。そしてこの直後 Dick は何時もの通り、女中風情相手にこうして喧嘩している自分は相手も自らも傷つけてゐるのだ、という悔悟と自責の念にかられる。そして夕食の席上妻の Nicole の口からこんな生活は何時までも続け

られるものではない。何時かは破綻の日がくるでしょう。然しこれはみな私の罪です。私が貴方を破滅させたのです。という言葉が洩れる。そして昔はあれ程建設と創造の希望に燃えていた青年医師であった筈だ。その自分が今は何事によらず、反射的に破壊的行動に出る傾向があることを強く意識する。そして自分でも病気の発作を恐れなくなった妻は、賢明にも夫の無口が日増しに異常に強くなるその裏に無気味な前兆を予感するのであった。夫の青い眼はかたくなな上に異常な光を帯びた。更に極めて不自然なまでの子供に対する関心や溺愛振りも空恐ろしい。

④ Margin 号事件

Nicole自身病気の再発を恐れない程、自分の健康に自信を回復した。その頃この夫婦にとって決定的な家庭の破綻をひき起す事件がもち上がった。それはニース湾に浮んでいる Golding氏所有のヨット——margin 号で催された夕食会であった。これを直接きっかけとして夫婦は離別の方向を辿ったのである。実はこの夕食会の席には、一別以来ずっと Nicole に心を寄せ続けてきたフランス人の伊達男 Tommy Barbon が居合せたのである。かねて、Nicoleは怒りっぽく、不機嫌で黙り屋の夫よりも、ロマンチックで冒険好きの Tommyに心を惹かれてきた。彼女は元来自分で映画出演を強く希望する程派手好きである。そして自己顕示欲、名誉心、嫉妬心の強い女である。そこでヨットの上でめぐり合った二人は、周囲の人に対する気兼ねもなく愛情を示し合うのである。長年、精神病を病んでいた間彼女は外からの圧力と内からの制約とで固く自我を閉ざされてきた。それが今急激に自己主張を始めたのである。久しく再会の日を待ち焦れてきた、彼女の最も憧れるタイプの男性——勇敢で冒険好きな男性——にめぐり合ったのである。そして年甲斐もなく彼に愛情の告白をする。

The foreignness of his depigmentation by unknown suns, his nourishment by strange soils, his tongue awkward with

the curl of many dialects, his reactions attuned to old aalrms — these things fascinated and rested Nicole; in a moment of meeting she lay on his bosom, spiritually going out and out. p. 286

このTommyにはロンドン随一の悪女と異名をとっている不可解な女性Lady Carolineがつきまとっている。彼女は一見肺病病みのように青白く弱々しい。このLady CarolineはTommyを、Nicoleに横取りされた腹立ちまぎれに、悪意を込めて Dick の好ましからざる評判を一座の者に披露する。即ち Dick はヨーロッパ各地の社交場で札つきの怪しい人物だという。昔の友達 Mary North今のMary Minghettiと仲違いし、ローザンヌでは名うての悪党仲間と交際している、というのである。これを聞き乍ら敢て抵抗の意志を示そうとしない夫の不甲斐なさに対して、遂に妻のNicoleが腹をたてる位であった。そしてすべてを諦め棄てた Dick は如何にして、妻を恋人の Tommyに譲るべきかの方法を探る状態であった。そして仲介業をやっている Tom が生計費、資産の点で不足がないか、自分に援助の余地がないか親切にも申し出るのである。この事件を境として、Nicole の意識には増々急激な変化がみられた。全て夫婦の話し合いにもNicoleが主導権を握っている。そして一方では自分が夫以外の男性に異状の興味を感じていることに驚く。同時に又彼女は他の女性だって愛人を持っている以上その行為は自分にも当然許されてよいものであると結論する。

In the fine spring morning the inhibitions of the male world disappeared and she reasoned as gaily as a flower, while the wind blew her hair until her head moved with it. p. 295

更に従来自分の安全と保護を保証し続けてきた足場は一挙に崩れ、我が精神の内部に変化が起っている。現在の自分はたとえるならば、断崖絶壁に臨んで、今にも飛び立とうとし乍ら、なおバランスを保っている人間のようなのである。そして現在、夫婦間で最も不幸な点は、夫の自

分に対する徹底した無関心なのである。これは Dick の過度の飲酒となって現われている。

Nicole did not know whether she was to be crushed or spared- Dick's voice, throbbing with insincerity, confused the issue; she couldn't guess how he was going to behave next upon the tortuously slow unrolling of the carpet, or what would happen at the end, at the moment of the leap. p. 298

然しこの年 1929年の7月、晴れ上がった空の下、リビエラの砂浜で、楽しげに遊んでいる Diver 家の4人の家族は、一見幸福そのものであった。然し今では Nicole には、自分と夫の立場がすっかり入れ変っていることが明確に意識されるのであった。今の夫は患者の如く、弱者の如く、憐れな存在でしかない。彼の子供達に対する視線にも、保護者のそれではなく被保護者の感がある。彼女は冷静に夫の動静を観察して彼に同情する立場になっていた。

此の年の夏 Rosemary は相変わらずリビエラの浜辺へきて Dick に逢うが、二人の関係はもう冷却し切っている。39才の Dick は肉体の衰えを強く意識している。それ以上に自分の精神的荒廃の評判を気にかけている。

'Did you hear I'd gone into a process of deterioration?' 'Oh, no. I simply just heard you'd changed. And I'm glad to see with my own eyes it isn't true.'

'It is true,' Dick answered, sitting down with them. 'The change came a long way back but at first it didn't show. The manner remains intact for some time after the morale cracks.'

この告白を聞くと、Rosemary は、改めて Dick が以前の魅力に溢れていた時代の彼から如何に遠い男になっているか痛感するのである。そして彼女はアメリカ国務省が欧州に派遣している外交官仲間の間で、Dick に関する噂が極めて悪いことを知っていた。Dick と Nicole の結婚にしても、Nicole が放蕩者の医者に恋して身をまかせたものである。この破滅に瀕している結婚の犠牲者は専ら Nicole の方である、と

いうのである。

更に Dick にとってそれ以上に不利なことは欧州至る所の社交界で彼は好ましからざる札付き人物だということである。

かくして医師としての Dick をもはや必要としなくなった Nicole は Dick を捨てて、自分は Tommy の許に走る。彼女は多年の迷路を抜けて元の精気潑刺たる彼女に返っている。彼女は新生活への出発に当ってさわやかに又、幸福そのものである。大きく豊かなバラの様に咲き出ている。そして打合せした Tom を迎え入れる時、彼女のもとに跪く恋人に崇拜されることを無上楽しく感ずる。これが新たな人生の神秘だと思ふのであった。彼女は Tom の人格の支配するままに我が身をまかせ乍ら、喜んで彼に従いたいと思う。これは Dick との10年間にわたる結婚生活の間に一度も経験しなかった感情である。

Moment by moment all that Dick had taught her fell away and she was ever nearer to what she had been in the beginning, prototype of that obscure yielding up of swords that was going on in the world around her. p.317

一方 Avignon の駅で Rosemary を見送った Dick 一人悄然と我家に帰る。その姿を遠くに認めた彼女は一層憐憫の情をもよおすのである。

⑧ 結 び

主人公 Dick Diver は貧困乍ら広く敬愛をあつめた英国国教派の牧師の息子であった。青春時代の彼は、容易に在来の中産階級の成功の記章にすべて身につけていた。即ちイェール大学奨学金、オックスフォードのローズ奨学金、ジョンズ・ホプキンスの学位、更に戦時3年間、ウィーンで最高精神医学者 Dohmler 博士について研究等である。然も彼は美貌で健康、全身魅力に溢れていた。彼の失敗の第1の契機はシカゴの罐詰工場主 Warren 家の次女と結婚することであった。彼は心中一方でこれに抵抗を感じ乍らも、莫大な妻の資産によって、海外居住

者特有の優雅で洗練された社交界の雰囲気浸ることを望んでいたのである。Dick は一方において基本的に金銭的利得と無関係な生活の訓練をうけている。それは奉仕の生活であり、又は知識の追求それ自体を最大最高の報酬とする精神医学者としての学究生活である。その反面、父親の貧乏な牧師の生活を眼のあたりみてきた Dick は金銭の所有に対して深い憧憬を持った。彼は一時に両者を追ひ求めたのである。彼が失敗のコースを辿った原因としては、次に、彼が幼時の時以来守ってきた自己抑制、訓練の放棄がある。これらの美德は彼が幼年期から念入りに父親に躰されたものである。これが瞬間的衝動によって脆くも崩れ去るのである。この訓練の失敗の最初の事例は、彼が Rosemary Hoyt と恋仲に陥ちたことである。彼はこれが明確に自分の生涯の転換点を劃するものであると意識していた。

今年代を追って Dick の精神的変化・生涯の下降線の経過を辿ってみるならば、1919年に Nicole と結婚、1925年 Rosemary と逢い、1929年には彼の崩壊を決定づけた Rosemary との空虚な情事がある。これら一連の事例を象徴的に解釈するならば、在来のアメリカの訓練と献身を重んずる精神が、逸楽と放蕩の生活に変転したその象徴として Dick が存在したといえよう。然らば何故 Dick は、旧い道德律や、高貴な献身の精神が幼稚で然も未成熟の魅力の誘惑の前に手もなく無力に陥落したのか。これには大戦の終結を境として、1929年に至る約10年間にわたったジャズ時代を想起しなくてはならない。大人全体が子供に対して權威はもとより、自信も支配権もすべて喪失して、子供達の放逸を許した。否大人が子供の乱痴気騒ぎのお株を奪って、放埒に明け暮れた時代であったことを考慮に入れなくてはならない。

次に Dick の父親が信じた道德律とはそもそも如何なるものであったろうか。Dick は姉2人が相ついで死亡して数ヶ月後に生れた。そこで父親は子供の教育を母親にまかせておけば甘やか

す結果になることを怖れて、常に自ら息子の模範となって、甘やかしを阻止したのである。父親は息子に向かって、人生につき自分の知る限りを教え且つ話した。それらの大半は、牧師として父が経験したこと又行動したことの実例であった。真実ではあっても素朴で些細な事例ばかりであった。そして息子の養育上父は何よりも、直覚的本能・名誉・礼儀・勇氣などを力説した。そしてこれらの父親から譲りうけた、否父祖伝来の精神的遺産をば、Dick は、母国に帰って父の埋葬に列席した折を転期として、永遠に放棄すると宣言するのである。Dick が父の国の過去の文化に対する忠誠心を棄てて無価値で不名誉な生活に入るきっかけは、何も Rosemary との恋や情事だけに限られていない。彼はローマで私服刑事相手に喧嘩し、打ちのめされて牢に入れられた。Antibes では Lady Caroline のような如何はしい女性すら相手に、酒の上で口論して軽蔑される。これは心中にわだかまる暗い絶望感を主張しようと酒の力を借りるのである。そして支離滅裂の暴力を爆発させたのである。

以上のような人生の門出に当っては、威厳と魅力に溢れ、自己鍛錬と礼儀そして厳格な道德律を体現していた Dick であった。それが精神病患者の娘、然も千万長者の女性を妻として、不名誉な恋愛関係に落ち、遂には長年研究を続けてきた研究もおろそかになった。即ち精神分析学上の著述さえ、彼にとって新鮮な魅力を失った。そして診療の仕事も放棄する。やがて分裂症から全快した妻を新しい恋人に譲って彼はアメリカに帰った。そこで田舎町を転々と移住して全科開業医の生活を続けた。その中ニューヨークのロックポートで食料品店の女店員と関係したり、医学上の問題で訴訟事件に巻き込まれたりした。妻の Nicole はそうした好ましからざる噂話を聞くだけで彼とは全く音信不通である。2人の子供も、当初の計画にも拘らず彼を訪問したことはない。

Bibliography

Text: *Tender is the Night* F. Scott Fitzgerald Penguin Modern Classics 1968Reference: *Tender is the Night* F. Scott Fitzgerald Bantam Books 1951*F. Scott Fitzgerald — A Critical Portrait* Henry Dan Piper Southern Illinois 1965*F. Scott Fitzgerald — A Last Laocoon* Robert Skalar Oxford 1967A Study of *TENDER IS THE NIGHT*

Tokumoto MAKITA

Dick Diver, the hero of this novel by F. Scott Fitzgerald is the son of an American clergyman who was respectable if poor. He was quite a model of the conventional middle-class success; a scholarship to Yale College, a Rhodes Fellowship to Oxford, a medical degree at Johns Hopkins, and three years of post-doctoral study in Vienna during the War. He was a handsome, young, intelligent psychiatrist, who promised to attain an infinite success.

In 1919, he fell in love with and married a daughter of a multi-millionaire businessman in Chicago, Nicole Warren, a schizophrenic, because he could not withstand the temptation of money and also wished to lead an elegant and refined life of American expatriate groups in Europe in those days. Ceasing to continue the hard rigorous career as a scientist and medical doctor, and also giving up the American bourgeois virtues by which he had been brought up in his young days by his father, he soon was obliged to take up his wife's manner of life. This marked the first moment of process of failure and deterioration.

After settling at the Vella Diana at the Riviera, he was captivated by the brilliant beauty of an Hollywood actress, Rosemary Hoyt. His wife's recurrent sickness, his love affairs with Rosemary and his desperate though unsuccessful attempt at pursuing his studies drove forcefully him to forsake not only training, virtues and moral codes he had inherited from his father, but these made him well aware that he was a complete failure, and desirous to bury his helpless despair in drinking.

Finally his wife, Nicole, abandoned Dick for Tommy Barban, an Italian romantic barbaian, who had been courting her. Dick returned to America and is now a general practitioner in a small country town and is said to have been involved in an illicit affair.

This novel can be interpreted as a combination of three levels or phases, each representing a different significant story.

- a) A history of an American individual citizen, Dick Diver, who was destined to lead life of deterioration and corruption.
- b) A picture of American manners among the expatriate groups in Europe in the 1920's.
- c) A symbolic study of two cultures, old and new, and how they came to be collided with each other, representing Dr. Dick Diver as the champion of the new one and having Nicole Warren and Rosemary Hoyt as representing some particular characteristics of a charming but corrupt European culture.

Here in this paper, the author has deliberately tried to emphasize the manner of conflict between these two cultures.